

核と人間

—現代におけるヒロシマの役割—

平岡 敬

いま、地球上には約2万7,000発の核弾頭が配備されており、その存在が人類の生存を脅かしている。それにもかかわらず、核軍縮への動きは停滞したままである。

—昨年(2005)、ニューヨークで開かれた核拡散防止条約(NPT)再検討会議は、失敗に終わった。

それは、冷戦が終わって世界戦争の危機が遠のいたため、大国が協調して世界秩序をつくろうという契機が失われてしまったからである。さらに、米国が核軍縮に熱意を示さないことに大きな原因がある。

米国は安全保障面での核兵器の役割を重要視し、包括的核実験禁止条約(CTBT)は批准せず、小型核の開発を進めるとともに、核兵器による先制攻撃容認の姿勢を打ち出している。

他国に核放棄を求めながら、自国の核を手放さず米国に対する非核保有国の反発は強く、NPT体制に対する信頼は大きく揺らいでいる。

インドはNPT体制の不平等性を理由に加入していないし、北朝鮮は1993年に脱退してしまった。

そこに、広島・長崎の原爆投下から62年たってもなお、人類が生み出した核兵器をコントロールできず、扱いかねている国際社会の苦悩がある。

核兵器をめぐっては、62年前と比べて、はっきりしていることが幾つかある。

- ① 核兵器保有国が増加し、さらに増える可能性があること。
- ② 核兵器の小型化や性能向上の研究が続いていること。
- ③ 相次いだ核実験や劣化ウラン弾の使用などによって、放射線被曝者が激増していること。
- ④ 「核の闇市場」を通して、核兵器が世界中にばら撒かれる危険性が増大したこと。

これらの事実は、核兵器の脅威が時間の経過とともに大きくなってきており、広島・長崎の「核兵器廃絶の訴え」が、残念ながら、核兵器を無くすことも、戦争を防ぐこともできなかったことを示している。

しかも、そこには、日本が「核の傘」の下にありながら、他国に対して「核兵器廃絶」を求めるという偽善性に目をつぶってきた広島の人々の平和思想と運動の弱さが露呈している。

それゆえ、テロリズムの脅威が人々を襲う時代にあって、私たちはあらためてヒロシマ・ナガサキの意味を問わなければならない。

人類は、古くから多くの戦いを経験してきた。

戦争の原因は領土問題であったり、宗教的な対立であったり、あるいは革命であったり、様々だが、戦う双方にとっては、いずれも戦うに足るもっともな理由があり、「正義」は自分たちにあると信じて、戦争をしてきた。

しかし、冷静に後から振り返ってみれば、本当に戦争しか解決の手段はなかったのか、なぜあのように人間同士が憎みあったのか、ということについて理解できず、戦争が愚かな行為にみえるのだ。

にもかかわらず、人類はいまもアフガニスタン、イランをはじめ、世界各地で戦争を繰り返している。

こうした戦争の最大の犠牲者は、いつの場合も都市であり、そこで暮らす住民であった。

19世紀までは、戦争は戦闘の専門家や専門家集団、すなわち軍隊によって戦われてきた。ところが、20世紀に入って戦争は「国家総力戦」という形をとって、国民全員が戦争に駆り立てられるようになった。しかも、科学の進展による兵器の開発と運搬手段の発達とが結びついて、いったん戦争が起これば、これまでとは想像もつかないような大きな破壊と被害を都市にもたらすことになった。

第二次世界大戦の死者は、戦闘員、非戦闘員を合わせて約 5,000 万人といわれるが、そのうち民間人の犠牲は約 2,500 万人に上っている。

なかでも忘れられないのは、第二次大戦末期に広島と長崎に投下された原子爆弾による惨禍である。史上初めて使われた原爆は、一瞬にして両都市を壊滅させ、多くの人命を奪い、傷つけた。生き残った人々は、放射線による後障害に今も苦しんでいる。

放射線が人体に与える影響は、まだ十分に解明されてはいないが、明らかなことは被爆後、数年たって白内障、白血病、甲状腺がん、乳がん、肺がんなどの障害が現れることである。

一例をあげれば、2歳の時に被爆した佐々木禎子さんは、健康に育っているように見えたが、被爆から10年たった 1955 年に放射線による白血病と診断され、入院した。禎子さんは病床で、毎日飲む薬の包み紙でツルを折り続けた。

日本ではツルは千年生きるとされ、長寿の象徴となっているため、禎子さんは折りヅルに回復への願いをこめて、折り続けた。しかし、その願いも空しく、八か月の闘病生活の後、死亡した。

彼女の死を契機に、折りヅルは核兵器廃絶と世界平和を求める運動のシンボルとなった。

この夏、公開された『夕凧の街 桜の国』という映画がある。これは広島出身のこうの史代さんの同名のマンガを映画化したものだ。私は昨年、ある週刊誌から書評を頼まれて、初めてマンガを手にとったのだが、1968年生まれの、この若い女性の原爆を見る目の鋭さ

に驚かされた。

私たちは毎年、今年も被曝者が何人死に、その名前が慰霊碑に納められた、というような報道に接している。そして、その死者を原爆犠牲者という表現で受け止めている。

ところが、このさんのマンガの主人公は、原爆後遺症で亡くなるのだが、死の直前に〈原爆を落とした人は私を見て「やった！またひとり殺せた」とちゃんと思ってくれとる？〉と言う。つまり、原爆は人を殺すために投下し、戦争が終わってもまだ殺し続けている、ということ告発している。

このさんの鋭い視線は、見事に核兵器の本質を射抜いているのである。

19世紀までの戦争は、まだ法と秩序と節度の世界にあった。しかし、いまはそれらがすべて失われ、無視されている。

例えば、米国はイラク戦争で、武装集団を何人殺した、ということ戦果として発表する。まるで人を殺すことが戦争の目的になってしまっているようだ。

そこに見られるのは、人間の退廃である。

理性を失い、退廃した人間は、第二次世界大戦ではヒロシマとアウシュビッツの悲惨を生み出した。

戦争が終わって62年たった今、さらに今後も、私たちは永遠にヒロシマとアウシュビッツを語り続けなければならない。

なぜ語り続けるのか？

それは犠牲者がとくに多かったからだろうか？

それとも、殺され方が異常な形だったからだろうか？

確かにそういうこともあるだろうが、決してそれだけではない。犠牲者の数が多いということであれば、ドレスデンも東京空襲も、死者の数では広島、長崎を超えるかもしれない。

しかし、私たちはヒロシマ、アウシュビッツという地名を聞くと、人間というものを考えざるをえない。それは、この二つの地で起こったことが、人間とは何なのか、人間はどこまで理性に背を向けて生きていけるのか……ということ、私たちに問い続けているからだ。

人間はすばらしい文化を創造する光輝く存在だが、一方でヒロシマ、アウシュビッツを生み出すような醜い心も持っている。

ヒロシマ、アウシュビッツの出来事の底に共通して流れているのは、「皆殺しの思想」である。核兵器はまさしく、その思想を体現した兵器であり、広島ではまだ人間を虫けらのように殺し続けているのである。

広島が戦後一貫して、核兵器廃絶を訴えてきたのは、核兵器が持っている「皆殺しの思想」を否定し、自らが人間であろうとしたことに他ならない。

世界の平和を考える時、私たちは世界の安全は核兵器に頼るのか、あるいは核兵器廃絶によるのか、という問題に直面する。また日本の安全は核兵器がないと守れないのか、という問いにも答えなければならない。

それはいま国際社会で信奉されている核抑止論をどう考えるか、ということである。

- ① いま国際社会の現実を見ると、核抑止論で正当化されている核保有が、核拡散の引き金となっている。
- ② したがって、核抑止政策を継続することと核不拡散政策は両立しない。
- ③ これが核抑止論の矛盾であり、真剣に核拡散を阻止するためには、核兵器廃絶しかない。

これに対して核兵器を倫理的に否定することは正しいが、それだけでは国際社会の暴力に対抗できないのが現実だ、という反論がある。

しかし、私たちは広島、長崎の惨禍は決して過去のものではなく、いまもセミパラチンスク、ネバダ、南太平洋、オーストラリアなどに多くの核実験の被害者がおり、湾岸戦争やイラク戦争で劣化ウラン弾の被曝者が生まれている事実を直視しなければならない。

冒頭で、広島を平和思想と運動の弱さについて触れたが、これまで日本人は、米国という母親の胎内で、平和を語り、核兵器廃絶を訴えてきた。日本の安全は米国に任せて、思考停止の状態だった。

広島が本気で核兵器廃絶を考えるなら、当然日米安保体制と「核の傘」の問題に踏み込まなければならない。

私は、将来的には日米安全保障条約はなくしたほうが良いと考える。もちろん一気には出来ないし、段階的に努力していくことが必要だ。

そして、これまでの日米関係を基軸においた安全保障に代えて、東アジア諸国間の同盟や友好関係を中心とした安全保障に重心を移していくべきだろう。

日本が、核兵器を手放そうとはしない米国に寄り添っている限り、またそのことを疑問に思わない限り、広島を訴えるは世界の人々の胸に届かない。それが広島を平和思想と運動の弱さである。

広島は、被害を訴えると同時に、自国政府に核廃絶政策の実行を迫ることによって、その平和思想と運動の脆弱性を克服すべきだと思う。

大量殺戮兵器の使用という軍事的手段の非人道性については、広島は激しく非難してきたが、自国の利益のために他国の民衆を犠牲にするという政治目的における非人道性を指弾することが少なかった。

それは自らの被害に目を奪われて、ともすれば人間の立場に立つ視点を忘れがちだったからではないか。広島への原爆投下と、ベトナムやイラクで繰り返された惨状とは、本質的に同じことが行われたという認識が重要である。

広島で核兵器が人間にもたらした悲惨を見てきた私は、核兵器が惹起する問題を人間の立場から捉えるべきだ、と思っている。

国家の立場に立つと、力関係が規定する国際政治の現実を肯定し、「核抑止力」による国際秩序の維持を、やむをえない選択として支持してしまいがちである。

人間の立場に立つことは、国家の枠を超えて、核兵器に依存する現実を変えて行こうとすることに他ならない。

それは極めて困難な道ではあるが、未来への確固たる信念と人間への信頼を持ち続けることによって可能となる。そして、国家の枠を突き抜けることによてしか、核抑止論者に勝つことはできない。

一方、希望に満ちた未来を築いて行くためには、私たちは改めて、科学・技術文明のあり方を考え直さなくてはならない。

そのことに関して、私はある出来事を思い出す。

1997年7月、米国はネバダの核実験場で「臨界前核実験」を行なった。その実験が成功した瞬間、テレビの画面には、実験に参加した科学者・技術者たちが一斉に拍手するシーンが映し出された。それは戦慄の光景だった。

科学者・技術者にとっては、その実験は科学的、技術的に興味あるものであり、その成功は喜ぶべきものだったのであろう。

しかし、想像力が欠如した彼らには、その実験の延長線上にある殺戮が見えないのだ。意識的、無意識的にかかわらず、科学者の殺人への協力は、原爆を開発したマンハッタン計画に参画した科学者のあり方を思い起こさせた。

人類は核兵器をつくる知識と技術を身につけてしまった。それゆえ、広島が訴えが実って、地球上から核兵器が無くなったとしても、人間自身が「皆殺しの思想」を克服して、真に平和を愛する人間に変わらない限り、人類は核兵器の恐怖から逃れることはできない。

そう思うのは、私たちがヒロシマ、アウシュビッツを経験したからである。

ヒロシマが核時代に果たすべき役割は、まさに人間の立場に立って、「皆殺しの思想」に支えられた核兵器を否定することである。

さらには、広島が惨劇の記憶によって、現代の科学・技術文明のあり方をもう一度、考え直すことである。